

世界ランカーにはチートはいりませんよ。

天道 士

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目が覚めたら、そこは\_\_\_\_\_。

処女作です。原作をあまり観てないので、温かく、こいつヤバwと、見守ってもらえれば、幸いです。主にGGOを舞台としています。誤字脱字の指摘があれば、なるべく早く、対応させてもらいたいと思っています。不定期投稿ですが、よろしく願います。

# 目次

第十二話	52
第十一話	48
第十話	39
第九話	35
第八話	31
第七話	28
第六話	23
第五話	19
第四話	14
第三話	10
第二話	6
第一話	1

第十三話	56
第十四話	61
第十五話	66
第十六話	75



## 第一話

ああ、ついにこの日がきた。

「案外、俺もここでの生活に慣れたのかもなあ。」

男はそう言つて、立ち上がった。

「ついでにい。」

そう言われて、男は従う。

長い囚人生活も今日が最後だ。

仕方がなかったとは言え、流石にやり過ぎたのかもしれない。

いや、俺は間違つてなどいない。あそこで、俺が、殺さなかったのならば、きっと俺も含めてあそこに居た人は、全員死んでいただろう。

いや、もしかしたら、俺なんかが出しゃばらずとも、他の誰かが解決してくれたのかもしれない。

「歩くのが遅いぞ。」

ぼんやりと、過去のことを思い出していると、注意されてしまった。男はそれに対し、  
「わるい。」





前世で俺は、プロゲーマーだった。高校生で、部活と勉強の両立が、難しい中、数多のFPSゲームの大会で優勝し、その賞金やスパーサーからのお金で、一人暮らしには、十分すぎる生活を送っていた。あの日までは――。

その日俺は部活帰りで、部活終わりに、メンバーとカラオケに行った後一人で、お金を下ろしに近くの郵便局に来ていた。そこで事件は起きた。覆面を被つり、銃を持った男たちがいきなり入ってきたのだ。そんな中俺はいたって、冷静だった。怯えるでもなく、慌てているわけでもなく、ただ一つ言えることは、この時の俺の判断によつて、俺の人生は大きく変わってしまった。ということだけだ。

俺は、近くに居た覆面の男にスパイクを思いつきり、投げつけ、飛びかかって、素早く銃を奪いその男を殺した。呆気にとられている覆面の男たちの頭を次々に抜いていった。

ゲームと同じ――。そんな風に思っていたのだろうか。

弾が切れた時には、覆面の男達は全員倒れており、周りの人はみんな、俺を見て怯えていた。

後になって言われて気がついたが、覆面の男達は銃こそ持っていたが、特に何かをすることなく、俺が全員殺してしまったので、彼らは一度も発泡すらしてなかったのだ。



裁判ではそれが決め手となり、過剰防衛どーのこーの言う間も無く、懲役15年。死刑判決を言い渡されたのだった。

## 第二話

この世界に来てからもう、16年もの時が流れていた。前世の記憶から自分の出来なかったことを中心にやるよう生活してきたが、やはりと言うか、俺にはゲームをしないという選択肢はなかった。

画面越しのプレイから、仮想現実でのプレイに変わったものの、殺ることは変わらな  
い。GGOを始めて思うことは前世の記憶。ゲームの中でも、銃を握るとあの事件が  
蘇ってくる。それでも、俺にはコレしかない。合法的に人を殺すことを楽しめるのが、  
このゲーム。だから、俺があ的事件のことをゲーム中に思い出しても、考えることはあ  
の時と同じ。

「生きのいい的だ。」

人を殺した身でありながら、普通に学校へ通い、部活で結果を残し、帰宅後は、ゲー  
ムを楽しむ。前世の、事件がある前の生活と全く同じように生活をしているのだ。やは  
り俺は狂っている。

ただ、一つ違うことがあるとすれば、それは前世の俺よりも今の俺の方が、きつと現

実でも人を、もつと簡単に殺すことができるだろう――。

『間も無く試合が開始されます。プレイヤーの皆さんは準備を始めて下さい――。』  
「ワンショットキルで全員仕留めてやるよ。」

この大会はb o bのような、正式な大会ではないため、誰でもプレイヤー名等を明かすことなく、自由に参加することができる。だから、例え一位だとしても、賞金が二位以下に渡されることも、珍しくない。

「アイツ、この間の非公式戦で一位だったヤツじゃね？」

「え、あのA W Mの？」

「うーん、多分そうだと思うんだけどよー。アイツ顔見せねーからなあ。」

「マジかよ。本物なら無理じゃん、あんなチーター。」

「だよなー。2000mなんて抜く奴は軍人でも、そーそーいねーだろ。」

「俺、今回やめよつかなあ。次のb o b控えてるし。」

「別にまだ本物と決まったわけでもないのに。」

「それもそうだな。やっぱ、俺やるわ。」

「…気分屋かよ。」

『…アバターが転送されます。試合開始まで、5, 4, 3, 2, 1, ……スタート。』

「いた。」

バ、パン——。

見つけてから、3秒と掛からずにスコープを覗いて、敵を仕留める。これが元世界ラシカールのクイックショット。伊達に20年も、この手のゲームをやってはいない。

「残り三、四人つてとこかなあ。後一人で、20キルだから頑張ろー。」

「あ、またいた。」

バン——。

「やったー。にじゅっキルー。」

その時、背後から吹く風の流れが僅かに変わった。すぐさま後ろを向くかと思えば、スコープを覗き、流れるように撃つ。

バ、バ、パーン。

相手に完全に背後を取られたにもかかわらず、恐るべき反応速度で、頭を確実に抜いていく。

『YOU W I N E R!』

試合が終わったのにも関わらず、会場は異様な静けさに包まれていた。

大会の中継を観ている人は、皆こう思ったであろう。

(「こいつ、化けもんだ……」)と。

## 第三話

「だるー。」

そう言いながら、アミユスファイアを外し、ベッドから起き上がった。課題は終わっているが、これから部活のレポートを書かなければならない。

今日の部活で、何を意識して走ったかなど、詳しく顧問のハゲ頭を思い浮かべながら書いていく。

半分ほど書き終えた頃に、ちょうど電話がかかってきた。

「はい、もしもしー?」

『「なおきー、生きてるかい?」』

「いや、なんで息子に対する電話の最初に生存確認してんだよ!電話出た時点で、生きてるってわかるだろ!」

電話の主は母親だった。

『「なんだい、つれない息子だねー。少しくらい母ちゃん戯言に付き合ってもいいじゃないかい。』』

「戯言だという認識があるのなら、やめてください、母さん。」

『ほんつと、つれない息子だねー。今月のお米届いたかい?』

「ああ、それなら今日届いたよ。そのためにわざわざ電話してくれたの?」

『それだけじゃないさあ、息子の安否確認ついでに、元気にやってるか、とか。』

「ついでって、夏休みに帰ったばかりだし、まあ、わざわざ電話してくれてありがとう。また冬休みになったら、そっちもどるわ。」

『「そーかい。なおきが元氣そうで母ちゃんもよかったわ。どーせまたゲームばかりやってるんだから、友達と遊んだりしなさいよ。』』

「わかってるって。じゃあ、またね。」

本当に親切なひとだ。

前世では、俺の本当の親は事故で死んで、俺は父方のおじさんの家に引き取ってもらい、居心地の悪さから高校で、一人暮らしを始めたのに。今世の母親は、俺が実の息子でない知りながら、自分の本当の息子のように、接してくれる。それが、もどかしくもあり、距離間を掴めないから俺は再び、一人暮らしを始めたのだ。

「部活のレポート途中じゃん。」

その後すぐに書き終え、床についた。

次の日の放課後、部活もなくスーパーに立ち寄ったところ、同じ高校の制服を着た女子高生二人が、一人の女の子を連れて、路地裏に入っていくのが見えた。見て見ぬふりをするのは簡単だが、俺はそのために人まで殺す人間だ。見逃すはずもない。

「おい、あさだあー。ゲロるなよ、この間お前が教室で吐いた時大変だったんだからなあ？」

「君たち、そこで何をしている？」

「ナニつて、ちよつとふざけてただけすよーつて、げえ?!ふ、風紀委員長お!!」

「悪ふざけはよくないな、学校外だからと言って、一生徒であることに何らかわりはないからね。」

「つあ、あたし用事あるの思い出したわ。悪い、先帰つてるわ。」

「わ、私もっ。」

「待って、置いてかないでー。」

タツタツタツタツ：

「大丈夫かい？」

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます。」

「いや、いいんだよ。生徒を守るのも生徒会、風紀委員長として当然のことだからね。」

「風紀委員長は何故ここに？」



「買い物をしようと思つて、立ち寄つたらたまたま見かけてね。あの子たちに今回みたいなこと、よくされてるの?」

彼女は応えなかつたが、静かにうなずいた。

「そつかー、学校外だとあまり生徒会も機能しないからね。また何かあつたら連絡してくれば、出来る限りのことはするから。」

そう言つて連絡先を書いた紙を渡して、スーパーに戻ろうとした。

「待つて下さい。あ、あの私も買い物途中なので、一緒に行きませんか?」

## 第四話

朝田詩乃 side :

私は父親の顔を知らない。私がまだ、二歳にならない頃に、交通事故で他界したと、聞いている。事故の後、母と私は東京をでて、母方の実家に身を寄せ、そこで平穏な日々を送っていた。

そうあの日までは\_\_\_\_\_。

帽子を深く被り、よだれを垂らしながら、カバンを持って郵便局にはいつてきたその男は、私の母を突き飛ばし、カバンから銃を取り出して、こう言った。

「このカバンに金をいれろ、警報ボタンを押すなよ。」

「お母さん、！」

「早く、金入れろ。あるだけ全部だ。早くしろお！」

「はあ、はあいい。」

っパーン

乾いた音が、響いた。

そして私の足下に、金色の円柱形のナニかが、転がってきた。見ると郵便局員の人が、倒れていた。

「警報ボタンを押すなど言っただるおがあ！おい、お前！こつちに来て金をつめろ。早くしねえと、もう一人撃つぞ！」

と、男は母に銃を向けながら、もう一人の女性の局員に言った。

「撃つぞお！」

その時の私は誰に何を言われたのでもなく、体が先に動いていた。

ただ、母を守ろうと必死になっていたことだけは憶えている。

「はん、！」

私は銃を持った、男の右手に噛み付いた。

「っ、んがあ！」

男が銃を落としたの私は、を素早く拾った。

男は必死になって、私から銃を奪い返そうとしてきた。

「返せえ、かあえせえ！」

その時私は、必死に抵抗し引き金を引いた。

っパーン

狙って、撃ったわけではないが、弾は男の腹部にあたった。

「っ、んがあああああ！」

っパーン

今度は、男の右肩に命中した。

男はまだ、息があった。

っパーン

弾は男の頭にあたり、男は動かなくなった。

——— 守った。そう思い母を見ると、母は私を見て怯えていた。

私は自分を見た。手足には男の血が飛び散って、こびりついていた。そしてようやく、私は自分のしたことを理解した。

「うああああアアアああっ！」

私は自分の叫び声で、ベッドから飛び起きた。

時計を見ると午前三時だった。

あの日以来私は、はこんな夢を毎日のようにみていた。

母も同様に、あまり気の強い人じゃなかったから…。

最近はそのままで多くみなくなってきたのに、また――。

「朝食作らなきや。」

その日の授業の内容は全く頭に入ってこなかった。

放課後、スーパーに買い物に寄ると、見覚えのある人に声をかけられた。

裏路地に連れてこられて、お金を要求されたが、

「そんなに持つてゐるわけではない。」

と、断つて帰ろうとしたが止められ、親指を立て人差し指を向けられた瞬間、また発作を引き起こした。

自分の弱さを悔やんだ。でも、どうすることもできない

「君たち、そこで何をしている？」

## 第五話

主人公 side :

「待つて下さい。あ、あの私も買い物途中なので、一緒に行きませんか？」

「別に構わないけど、もしかして家近い？」

「はい、ここから歩いて10分ほどで着きますが。」

彼女の視線の先には自分の住んでいるアパートが見えた。

「僕も、ここから10分くらいのところに住んでるんだけど、案外近くに住んでいるのかもね。」

「そうですね。」

「じゃ、スーパ―にもどろつか。」

「はい。」

「あ、あの委員長は、野菜を沢山買われるんですね。」

「肉はこの間、大きめのを買ったからね。野菜は個人的に沢山食べるから、親に送ってもらう分だけだと、足りないし。あと、学校の外だから、べつに委員長って呼ばれるのはちよつと……。」

「あ、すいません。先ば、い？」

「あー、そー言えば自己紹介もまだだったね。僕はの名前は、黒田 直樹。よろしくね、朝田さん。」

「え、何で私の名前を…。」

「うちの学校は、残念なことに素行の悪い生徒が、沢山いるからね。大なり小なり、みんな校則を平気で破るから、逆に目立たないはずの、普通にしている一般生徒の方が覚えられているんだよ。」

彼女は感心しているように見えた。

「じゃあ、また。」

「っあ、」

彼女が、何か言いたいことがあるそうだったが、俺はは会計を済ませて、スーパーを出た。

家に着いて、家事を一通り済ませたあと課題を終わらせ、アミユスファイアをつけ、ベッドに横たわった。



「聞いたか？例の話し。」

「あー、あのデスなんかとかとかいうヤツのこと？」

酒場で、二人の男が喋っていた。

「そーそーそれ。なんでもゲーム内でソイツが銃で撃つたやつは死んじまうらしい。」  
興味深い話だと思った。

「どーせ、単なる噂だろーよ。このゲームのやり過ぎだお前。」

一人の男が、踏ん返り返って言った。

「つち、どーせ俺はゲーマーだよ。」

そう言いもう一人の男は、タバコを吸い始めた。

「っフフ。」

面白い。つい笑ってしまった。

そんなヤツがもし、いるのであれば、是非とも殺したいものだ。

人をゲーム内で撃つて殺す裏ワザでもあるのだろうか。ナーヴギアでもないのにそれはありえないか。今回のb o bに参加すれば、ソイツに出会えるだろうか？楽しみ

だ。今までは、公式戦に俺は一度も出ていないから取り敢えず一位になるのも悪くない。

だが、今日はミニガンを落とした。ヘカートIIを狩る予定だ。楽しみはじっくりと待つとしよう。

ヘカートIIの使い手は、集団で、プレーヤーキルをしているらしいから、奴らの戦闘後に殺す。物資も貰えるので、一石二鳥だ。つと、思ったが、全員殺した方が早いのでやめた。

「久々に凸スナでもしますか。」

俺は大きく伸びをして、ヘカートIIを持ったプレーヤーのいるであろうところへ移動することにした。

## 第六話

着いたのは荒野だった。奥に行けば、モンスターの多く出現する場所があるから、その帰りのプレーヤーを狙うとの情報を聞きここに来たが、何故か誰もいない。

「なぜ？」

「何故かって？そんなのお前を嵌めるためだよ。」

パーン

後ろから声がしたので、秒でエイムを合わせてヘツシヨをくらわす。と同時に自分のところに、スモークを転がし——凸る！

バババババン、バババン、バババババババババン、

相手がスモークめがけ無闇矢鱈と撃っているのを、横から抜いていく。

その時、遠くで何か光るものが見えた。俺は咄嗟の判断で、横に転がった。

っドス

と、音がしてさっきまで自分がいた場所の土が、抉れていた。

本来ならば、絶対にそんなことはしないが、今回は腰撃ちでそのスナイパーを狙って

撃ち、再び自分にスモークを投げる。

多分今の弾はスナイパーというより銃器に当たったのだろう。それで十分だ。俺は移動しながら、集団の枠から少し離れた敵だけを狙い撃つ。

敵も多少はあててくるので、このままだと自分がやられる確率の方が高い。どうすべきかと考えていたが、スモークがそろそろ晴れてくるころだ。本当はやりたくなかったが、今の俺にはこれしか方法がない。

俺は残りのスモークを全てスモークを相手に向かって投げる。そして、敵の方向にあたるかわからない弾を撃つ。

すると敵は頭が悪ければ同士討ちをするはずだ。だが、今回は何もしなかった。敵は案外、頭が回るのかもしれない。でも、お陰で俺は距離を取れる。せっかく凸スナしてののに、離れたら意味がないが、今回は戦略的撤退だ。

退き際をしつかりと見極めることも、世界ランカーで居続けるための秘訣だ。まあ、相手も銃声が聞こえなくなったら、逃げたと思いき始めるだろう。そこで、スモークの中から出てきた敵を俺は一人一人、頭を抜いていくというわけだ。

「あ、出てきた。」

パーン

一人、また一人と俺はスモークの中から出てきた敵の頭を抜いていく。

スモークが晴れ敵が居なくなった時、俺は赤い光を見た――。

ババババババン

その時の俺の行動は世界ランカーどうのではなく、ほぼ、反射的に勘でその場に伏せていた。

見ると、さっきまで遠くにいたスナイパーがここまでできていた。

「あの状況で全員の頭抜いて、腰撃ちで私にあの距離からあてるなんて、貴方もしかして本当にチーター？」

岩越しに聞こえてくる声は意外にも、どこか聞いたことがあるような、可愛らしいこえだった。

「本来ならば今のも完全に不意打ちのはず、全部避けるなんてどうかしてる。」

と、忌々しそうに続けて言った。

「俺にとっては、こんな男ばかりのむさ苦しいゲームに、ここまでの腕の立つ女のスナイ

「パーがいることの方が、よっぽど珍しいと思うが。」

「何が珍しいよ！アンタみたいなチーターの方が、よっぽど悪質で珍しいわ。どーせ、あたり判定をごまかす何かを使っているんでしょ？だから他の大会には出て、bobみたくない、公式戦では、それがバレることを恐れて出場しないんですよ！」

声の主は、俺のことをどうやらチーターだと誤解しているらしい。

「それなら、お前はここには既にいないはずだが。」

「何ですって？」

俺は説明する。

「さっき自分で、俺のことを褒めてくれていただろ、『腰撃ちで私にあの距離からあてるなんて、』って。」

「それは狙いが……って、あれ？でも、スコープを覗いて撃つことを条件であたり判定を全てヘッドショットになるようにプログラムしていれば——。」

「それなら、少なくとも俺が腰撃ちで君にあてたのは、俺の実力ってことになるな。」

「それは……。」

「それにスモークの中俺の撃った弾は、誰にもあたらなかった。それでもまだ、俺のことをチーター呼ばわりするか？」

「じゃあ何で、貴方は公式戦には出場しないのよ！」

「おっと、そうくるか。」

「それは……次のbobには参加するよ。……っあ！」

俺は思わず、知り合いでもない相手に、学校で使うような喋り方をしてしまった。  
だが、帰ってきた言葉は、思いもよらぬ応えだった。

## 第七話

「え、その喋り方、もしかして風紀委員長？」

「え、は、いや、人違いです。」

（「ヤバイ、何でバレたんだ。俺が風紀委員長をやっていると知っていると知っているということは、俺の知り合いなのか？でも、あんな喋り方の知り合い俺にはいない。てか、マジで誰？）

俺は恐る恐る両手を挙げて、岩陰から顔を出し、相手の顔を見ると、目が合った。

「っあー！」

現実世界の人間の顔と、仮想世界のアバターの顔は違う筈だ。だけど、その顔はあまにも似過ぎていた。

「もしかして、朝田さん？」

「やっぱり、風紀委員長だった。」

「ええ、何でわかったんですか？」

「だって、声も似てたし、さっきの喋り方で確信したわよ。流石の私でも。」



（「それでもおかしい。俺は自分のアバターの声も少し変えているし、顔もそこまで、一緒と言うわけでもない。」）

「そんなに特徴的な喋り方をしていたかな？」

「た、助けて貰った人の事くらいわかるわよ。と言うか、貴方、さつきまでの喋り方が、素なの？」

「いや、今の喋り方が普通かな。そう言う朝田さんも、僕と会った時とは喋り方が違うけど。」

「さつきまでは、責められていたが、今度はこっちの番だ。」

「私は別に普段からこの喋り方だし、あの時は気が動転していただけ。それに、立場の上の人には、敬語くらい使うわ。貴方と一緒にしないで。にしても、学校で風紀を守る立場の人間が、ゲーム内の風紀を乱すだなんて、信じられないわ。」

「いとも簡単にかわされてしまった。それどころか、追い詰められている気しかない。」

「今の僕の立場は、下ということかな？」

「チーターに立場も、なにも、ないわよ。」

「だから、さつきも説明した通り、僕はチーターじゃないから。」

彼女は明らかに信じていなさそうな顔をしていた。

俺はあることを決めた。

「じゃあ、僕が機動性とエイムのために、筋力パラメータも含めて全て極振りしているから、今胴体にハンドガン2発あてられたら死ぬ。と、言ったら？」

「え、その装備で、そんなことがあるわけ——。」

「僕を撃つたら、この間のスーパリーの近くのカフェで待っているから。」

「待ちなさいよ。私は貴方に従うなんて一言も言っていないし、まだ信じているわけでもないわ。」

「だからこそだろう。僕はこのゲームで撃ち殺されたことなんて、ただの一度もないけど、朝田さんが僕を撃つことによって、チーターじゃないことが証明されるのであれば、喜んで撃たれるよ。」

「はあー、わかったわ。ただし、カフェは貴方の奢りだから。」

「そのくらいは別に構わないよ。」

「じゃあ撃つけど、いいわね。」

「ああ、いつでも大丈夫だ。」

ババン

## 第八話

シノンスide:

ババンー————。

目の前でアバターが消滅していった。

「本当だったのね。」

私は市街地にもどると、ログアウトした。

全く、あの男は一体なんなんだろう。私は着替えながら、さっきまでの出来事を、頭

の中で整理してみる。

情報では、私が狙われている。と、聞いていたが、あの男は明らかに私と戦闘するつもりがなかった。それとは逆に、聞いていた通りの強さがあの男にはあった。ダインが話しかけた時点で、勝負は決まっていたはずだ。なのに、あの男はそれをいとも簡単に覆してみせた。

チーターがどうか、自分で言っておいてなんだが、いまだにあの男があの時、私を助けてくれた風紀委員長だとは、到底信じられない。でも、どことなくあの男と岩越しに会話をしていた時に、私は彼と同じものを感じた。そして、あの会話慣れしてなさそうな、口調。考えれば、考えるほどあの男と風紀委員長が、重なる。何かの間違いではないか。そんなことを思いながら、玄関を出て、カフェに向かった。

カフェでは、風紀委員長が待っていた。

「さっきぶりだね。」

「は、い。」

と応えたが、やはり私は驚きを隠せないでいた。

それからしばらくの間沈黙が続いた。しかし、それを破ったのは意外にも私自身であった。

「あのつ、先程はチャーター呼ばわりして、すいません。」

彼はおどろいたように、口を開けてぼかんと、した。

「あ、ああ。信じてもらえたなら何よりだよ。にしても、ヘカートIIの使い手がこんなにも近くにいただなんて、驚いたよ。朝田さんつて、強いんだね。」

「ええ、まあ。でも私、そんなに強くないですよ……。」

そう。強いのはシノンであつて、現実の朝田詩乃は、本当に情けないくらいに弱い。どれだけシノンがGGOで活躍しても、私は――。

「そうかな。僕はもつと自信を持った方がいいと思うよ。朝田さんさつきまでは、ずっと勝気な態度で話せていたじゃない。」

「それは――。」

「別に、わざわざ僕に敬語なんて使わなくてもいいよ。プレイし終わったら、一緒に戦った仲間だろ。仲間に敬語なんていらぬよ。」

本当になんなのだろうこの人は。

「はあー。じゃあ、貴方の言う通りにさせてもらうわ。直樹。あと、他人行儀で敬語を使っているのは、貴方も同じよ。」

彼はまた、口を開けたまま固まっていたが、やがて、くすつと、笑い、

「僕は、これが普通だからね。善処するよ、詩乃。」

この時、私は初めてこの人の笑顔を見た。

## 第九話

主人公 s i d e :

ババン —————。

彼女に撃たれ、そのままログアウトして、家を出た。

正直さつきの試合は、初手の段階で死んだと思った。が、運良く生き延び、あまつさえ、パーティをも壊滅させることができたのは、もはや奇跡と言つてもいいだろう。いくら元世界ランカーでも、流石にあの人数相手に、囲まれ完全に不意を突かれた状態で、生き延びたのはとても実力だけでは、証明できるものではない。

仮にもし、あの時と同じ状況になって、俺は果たして、生き延びることができらうか。いや、生き延びられたとしても、同じようにパーティ壊滅させることは、おそら

く俺にはできないだろう。

だから、問い詰められた時、つい俺は、いつもの口調で喋ってしまった。まさかそれで、正体がバレるとは思いもよらなかつたが。

そんなことを考えながら、歩いているとカフェに着いていた。

店内を見渡すが、流石にまだ彼女は来てはいなかつた。眠くならないように、ブラツクコーヒーを頼んで待っていると、彼女が来るのが見えた。

「さつきぶりだね——」。

彼女は短く、

「はい。」

と、だけ応えた。

そこからは会話が途切れてしまい、俺からは何も話せずにした。

でも、その沈黙を破つたのは意外にも彼女の方だった。

「あのつ、先程はチーター呼ばわりして、すいません。」

俺は驚いた。さつきまでのゲーム内での口調ではなく、初めて出会った時の口調だつ



たからではなく、俺のことを、チーターでないと認めてくれたことに対してだ。あれだけ、チーター呼ばわりしたいたから、てつきり俺がハンドガンで胴体二発あてられて死んでも、信じないと思っっていたからだ。

きつと今の俺の顔はさぞバカみたいな顔をしているのだろう。

「あ、ああ。信じてもらえたなら何よりだよ。にしても、ヘカートIIの使い手がこんなにも近くにいただなんて、驚いたよ。朝田さんって、強いんだね。」

「ええ、まあ。でも私、そんなに強くないですよ……。」

と、彼女は少し俯きながら言った。

「そうかな。僕はもつと自信を持った方がいいと思うよ。朝田さんさつきまでは、ずっと勝気な態度で話せていたじゃない。」

「それは——。」

彼女が何か言う前に俺はこう続ける。

「別に、わざわざ僕に敬語なんて使わなくてもいいよ。プレイし終わったら、一緒に戦った仲間だろ。仲間に敬語なんていらぬよ。」

彼女はようやく顔を上げた。

「はあー。じゃあ、貴方の言う通りにさせてもらうわ。直樹。あと、他人行儀で敬語を使っているのは、貴方も同じよ。」

そう言った彼女の顔に俺は見惚れていたのかもしれない。  
そんな自分に思わず笑ってしまった。

人殺しがなにを考えているのだと  
\_\_\_\_\_。

## 第十話

原作主人公（キリト） side

「いらつしやいませ。」

店を見渡すと、俺を呼び出した人物はすぐに見つかった。

「おい。キリトくん、こっちこっちー。」

「あ、あ。」

俺は少し俯きながら、呼ばれた方へ歩いて行つた。

席に着くと、その男は、

「ここは僕がもつから、何でも好きに頼んでいいよ。」  
と言つた。

「じゃあ、遠慮なくそうさせてもらいます。」

「ぎこちないな、その喋り方。話づらそうだから、ALLOと同じでいいよ。」

現実ではあの事件以来、お世話になってるがこの男はどこか信用ならい。と思うところがある。

「そ、そう。じゃあ、それも遠慮無く……。」

（「つて、たつか！こんなの奢るとかこの男本当になにを考えているのだろう？まあ、遠慮なく頼むが。」）

「え、えと、カフエ ア ラ ネージュと、りんごのシブースト。それから、シュー

ア ラ クレーム。」

「ご足労願つて、悪かったねー。」

と、全く悪びれることなくその男は言った。

「そう思うなら、銀座なんざ呼び出すなよ。それと、人前でその呼び方は辞めてくれ。」

心の底からそう俺は思う。

「うん？つれないな。一年前に病院で目覚めた君のもとに、真っ先に駆けつけたのは僕じゃないか。」

それを言われたら、何も言い返せないが……。

「で、何のようなんだ？もう、SAO関係の話は随分と喋った筈だろ？菊岡さん。」

菊岡はメニュー表を閉じた。

「ところが、今日はちよつと違つててね。これを見てくれ。」

そう言つて、菊岡はタブレットを取り出し、俺に渡した。そこには、知らない人物の  
写真が写つていた。

「誰だ？」

そう言つて返すと、菊岡はテーブルに置いて、俺に見せながら説明し出した。

「えーと、先月11月の14日だな。東京都中野区の某アパートで、掃除をしていた大家  
が、異臭に気付いた。これはと云うことで電子ロックを解除して、踏み込んで、この男  
を死んでいるのを発見した。死後5日半だった。部屋は散らかつていたが、荒らされた  
様子はなく、遺体はベッドに横になつていた。そして頭に……。」

「アミユスフィアか。」

俺は思わずそう口にしていた。

「その通り。変死ということ、司法解剖が行われた。死因は急性心不全となつた。」

「心不全つてのは、心臓が止まつたつてことか。何で止まつたんだ？」

「わからない。」

「お待たせ致しました。」

ウェイターが頼んでいたものを持って来てくれた。

「死亡後、時間が経ち過ぎていたし、犯罪性も薄かったこともあって、あまり精密な解剖は行われなかった。ただ、彼は二日間何も食わずにログインしっぱなしだったらしい。」

「その手の話は、そんなに珍しくないだろ。何かあるんだこのケースに。」

「インストールされていたゲームは、ガン　ゲイル　オンライン知ってるかい？」

「そりやもちろん。日本で唯一、プロがいるMMOゲームだからな。」

「彼はガン　ゲイル　オンライン、略称GGOで、10月に行われた最強者決定イベントで優勝していた。キャラクター名はゼクシード。」

「じゃあ、死んだ時もGGOに……。」

「いや、MMOストリームという番組に、ゼクシードの再現アバターで出演中だったようだ。ログで時間が分かっている。で、ここからは未確認情報なんだが、丁度彼が発作を起こした時刻に、GGO内で妙な出来事があつたつて、ブログに書いているユーザーがいるんだ。」

「みょう?。」

「とある酒場で、問題の時刻丁度に一人のプレイヤーが、おかしな行動をしたらしい。なんでも、テレビのゼクシード氏にむかって、裁きを受ける。などと叫んで銃を発砲したということだ。それを見ていたプレイヤーの一人が、偶然音声ログを撮っていて、動画サイトにアップした。ファイルには日本標準時のカウンターも記録されていて、テレビ

への銃撃とゼクシードが、番組出演中に突如消滅したのがほぼ同時刻だった。」

そんなSAOじゃあるまいし、俺はりんごのシプースを食べながら、聞き流した。

「偶然だろ。」

「もう一件あるんだ。」

思わず俺は、食べている手を止めた。

「っ何?！」

「今度のは11月28日、埼玉県さいたま市某所。やはり、二階建てアパートの一室で、死体が発見された。新聞の回郵員が中を覗くと、布団の上にアミューシアを被った人間が横たわっていて、同じく異臭が——。」

「っんふ、ウツフン。」

隣の席から注意されてしまった。

「ま、詳しい死体の状況は省くとして、今度も死因は心不全。彼もGGOの有力プレイヤーだった。キャラネームは、うす塩たらこ。今度はゲームの中だね。彼はその時刻、ギルドの集会に出てたらしい。そこで乱入したプレイヤーに銃撃された。」

「銃撃した奴はゼクシードの時と同じなのか?」

「おそらく。やはり、裁き、力といった言葉の後に、同じキャラクターネームを名乗っている。」

「どんな？」

「デスガン。」

「デス、ガン？」

「ま、九割方偶然か、デマだろうとは僕も思うよ。だからここは仮定の話さ。キリトくんは可能だと思うかい？ゲーム内の銃撃によって、プレーヤー本人の心臓を止めることが――」

「有り得ない話だと思うけど……。菊岡さん、アンタ実はもう一通り検証済みじゃないのか？エリート様連中が、頭を絞った後なら今更俺なんかの順番はない筈だぞ。」

「いやいやいや、僕はキリトくんにそんなことするわけないじゃないか。」

と、菊岡は慌てて否定した。

「僕は君と話すのが、好きなんだから。」

「やめだ。結論、ゲーム内からの干渉で、プレーヤーの心臓を止めるのは不可能。銃撃と二人の心臓発作は偶然に一致。」

そう言つて、俺は帰ろうとしたが、彼はそれを止めた。

「まった、待った。ケーキもう一つ頼んでいいからさ、あと少し付き合ってくれ。いやー、キリトくんがその結論を言葉にしてくれて、ホツとしたよ。実は僕も同じ考えなんだ。この二つの死はゲーム内の銃撃によるものではない。ということ、改めて頼む



んだが……、ガン　ゲイル　オンラインにログインして、このデスガンなる男と接触してくれないかな。」

「ハッキリ言ったらどうだ？ 菊岡さん。撃たれて来いってことだろ。」

と言うと、菊岡は頭を掻きながら、

「いやーまあ。」

と、認めた。

「やだよ。何かあつたらどーすんだよー！」

そう言つて背を向けると、服の裾を掴まれた。

「さつきその可能性がないって、合意に達したじゃないか。それにこのデスガン氏は、ターゲットにかなり厳密なこだわりがあるようなんだ。」

「こだわり？」

俺は椅子に座り直して、モンブランを追加で頼んだ。

「イエス。ゼクシードと、うす塩たらこは、名の通つたトッププレイヤーだった。つまり、強くないと撃つてくれないんだよ、多分。彼の茅場先生が最強と認めた君なら。」

「ムリだよ！ GGOってのはそんな甘いゲームじゃないんだ。プロがウヨウヨしてるんだぞ。」

「それだ。そのプロってのは、どういうことなんだい？」

「文字通りだよ。GGOは全バーチャルMMOで唯一ゲームコインの現実還元システムを採用しているんだ。」

「ほお。」

菊岡は興味深そうに、呟いた。

「簡単に言えば、稼いだ金を現実の金として、ペイバッグすることが可能なんだよ。プロってのは、GGO内で毎月コンスタントに稼ぐ連中さ。トッププレーヤーで、月に20万〜30万つてところらしい。そういつた理由でGGOのハイレベル連中は、他のMMOプレーヤーとは比較にならないほど、時間と情熱を注ぎ込んでいるのさ。俺なんか、のこのこ出ていっても相手になるもんか。他をあたってくれ。」

「まったまった、他の宛なんてないってば、プロの相手が重いって言うのであれば、調査協力費という名目で報酬を払おうじゃないか。これだけ。」

そう言つて菊岡は指を二本立てた。

「何でそこまでこだわるんだ？ ネットに有りがちな、オカルト話じゃないか。」

「そうだそこまでこの男が気にかけるには、それだけの理由が必要だ。」

「実はね、上の方が気にしてるんだよね。フルダイブ技術が現実には及ぼす影響というのは、今や各分野で最も注目されている。この一件が、それを規制しようとする勢力に利用される前に事実を把握しておきたい。その核心がほしい。こんなところでどうか

な。」

「へえ。」

「だから、真相を知るにはGGO内で直接、接触する他ないんだよ。行ってくれるかい？」

## 第十一話

???  
side

「彼がいるなら、わざわざ俺を呼ぶ必要もないでしょ。菊岡さん。」

そう、キリトと入れ替わりで店に入って来た男は言った。

「そうでもないさ、むしろ彼が保険で君の方が本命だよ。」

菊岡は、眼鏡をかけなおしながら言った。

「どうだか。彼一人で十分でしょ。俺の出る幕なんて有るはずもない。いくら何でも過剰戦力だ。」

男は菊岡の前に座りながら言った。

「それが今回はそうでもないんだ。まだ推測の域を出ないんだが、SAOサバイバーについては、レッドプレーヤーが関わっているかもしれない、という情報もあってね。」

菊岡はコーヒーをおいて再度念をおすように言った。

「君の言うように、過剰戦力だったらまだいいのだが、最悪の場合を想定しておきたいんだ。」

「分かったよ。それに元々俺は今回b o bに出る予定だったし、丁度いい機会だ、そのデスガンと彼を一般プレーヤーと間違えて撃つても、文句言ってくんじやねーぞ。」

「それで構わないよ。死神とまで呼ばれる君のことなら心配はいらないだろう。」

菊岡は少し皮肉っぽく、そう言い、立ち上がった。

「グリム、リパー？」

「そうそう。まあGGOみたいなゲームではよくある名前で、死神って意味。」

俺はコーヒーを飲みながら、そう応えた。

「案外、貴方も厨二クサイ名前をつけるのね。」

「まあね。そう言う詩乃はこういうキャラネームなの？」

「私はシノンよ。」

「それはまた、安直な名前で……。」

「別にいいじゃない。キャラクターネームなんて、自由なんだから。」

「それを言うなら僕も同じなんだが。」

「そんな事より、直樹。何故貴方はそこまで強いのか？」

「ここからが本番と言わんばかりに、詩乃は身を乗り出して聞いて来た。

「そんなのプレイ時間の差だよ。だって僕はこの手のゲームをもう、20年近くプレイしているんだから。」

「つえ？それって、どういう——。」

「あ、今のなし。やっぱなし。あの、聞かなかったことにして。」

「そんなこと出来る訳ないわよ。一体どういう事かきちんと説明し……。」

俺の身体は知らない間に震えていた。

「あははは。冗談だよ、冗談。流石にあり得ないでしょ。」

俺は、この時ほど自分の口が軽いことを悔やんだことはなかった。

「そんな顔されて、冗談とか信じられないわよ。」

詩乃は心配そうな目で、静かにそう言った。

「つすー、はあー。」

俺は大きく深呼吸した。

「詩乃は俺に前世の記憶があるって、言ったら信じてくれる？」

## 第十二話

詩乃 s i d e

「詩乃は俺に前世の記憶があるって、言ったら信じてくれる？」  
そう言った彼の顔は真剣そのものだった。

「俺は前世で人を殺したんだ。何人もの人をこの手で。」

彼はどこか遠くを見つめていた。

「高校2年の時、俺は部活仲間とカラオケに行った後、一人でお金を下ろしに郵便局に立ち寄ったんだ。」

そこで事件が起きた。銃を持ち、覆面を被った男たちがいきなり現れたんだ。



そこで俺はその内の一人の男から、銃を奪いその場にいた覆面の男たちを全員殺した。

何の抵抗をさせる余地を与えずに俺は――。

最後の男は完全にもう戦意はなかったんだ。けど俺は、俺はそいつを殺したんだ。

全員、全員だぞ！そいつら一度も銃を撃つことすら、してないのに！それなのに俺は

殺したんだ。

きつと、その時の俺は狂っていたんだ。

いや違う。

元からだ、元々俺は狂っていたんだ。

今だって俺は狂っている。こんなことを話したところで罪が軽くなるわけでも、まして

や、なくなることなんてないのに……！

俺は殺人鬼なんだ。人を沢山殺した。

でもこの世界で、GGOで合法的に人を殺せると知った時、俺は喜んだんだ！殺してもいいんだと。殺せるんだと。そして俺は忘れようとしていた。忘れてはいけないうに。自分から逃げたんだ。ゲームに。

そう。ゲームだ。俺はきつと殺した時も、ゲームだと思って人を簡単に殺したんだ。

だからあんなに楽しそうに、無抵抗な人間を簡単に、単純に、何も考えず！

おれはひとを殺した、ん、だ——。」

彼は泣いていた。さつきまで、大声で怒鳴っていたのに、静かに。自分を抱えて。彼は声も出さずに泣いていた。

私は彼をどうすることも出来なかった。

私は……。私はどうだろう。私も人を殺した。

けど、彼のようにこんなに自分を責めるほど、殺した人のことを考えたことがあっただろうか。

それどころか、私はさも自分だけが被害者かのように思っていたではないか。

彼の強さがようやく分かった。彼の強さは、どんな困難でも真つ直ぐに立ち向かえるところだ。自分の罪から逃れることなく、真つ直ぐに向き合い、苦しんで。

やはり、彼は強い。

そんな彼が自分に本当のことを打ち明けて、話してくれたのに私は何をしているのだろう。私も話さなければ——何を？私も貴方と同じ人殺しです。とでも言えばい

いのか。

違う。そうじゃない。そんなことを言いたいわけじゃない。私は、私は………！

いつの間にか震えていた私の手を彼が握っていた。彼の手もまた私のように震えていた。

## 第十三話

主人公 side

俺は勝手に自分のことだけを言いたいだけ言い、彼女のことは見向きもせずに話し終わった後も、一人泣いていた。

ふと彼女を見ると、彼女が震えていた。おもわず俺は彼女の手を握ってしまった。俺には彼女をどうすることも出来ないのに。する資格もないくせに。

俺は黙って、彼女の震える手を握っていた。

彼女は何も言ってこなかったが、俺の手を振り解こうとはせず黙って握っていた。

いつの間にか店内は誰も居なくなっており、それに気付いて俺は今更ながら安心した。

「詩乃、家帰ろう。」

彼女は俺の手を握ったまま何も言わずに立ち上がった。

彼女の震えは、止まっていた。

店を出ると、辺りはすっかり暗くなっており、帰る途中、誰一人としてすれちがうことはなかった。

「そう言えば、詩乃の家ってどこにあるの?」

自分のアパートについてから、慌てて気付いた俺は、彼女にそう聞いた。

「はい。」

「つえ、そうなんだ。本当に近くに住んでいたんだね、僕達。」

エレベーターに乗ると、詩乃が10階のボタンを押した。

押してから気付いたのか彼女は慌てて、

「直樹は何階に住んでるの?」

と聞いてきた。

「10階だけ……。」

「ホント、偶然ね……。」

エレベーターが止まり、俺は自分の部屋の前で足を止めると、彼女も足を止めた。

「俺（私）、ここだから。」

そう言つて、俺が指差した部屋の隣の部屋を彼女は指差していた。

「僕たち、隣に住んでて全く気付かなかつたっていうことかな……。」

「そういう事になるわね。」

どこか微妙な間が開いた後、

「ねえ、直樹。今日は貴方のところに泊めてくれない。」

と彼女が言った。

俺は驚いたが、黙つて頷いた。

「意外と片付いているのね。」

リビングに来て彼女が発した最初の言葉は、なんとも素っ気ないものだった。

「意外とは、失礼だなあ。これでもきちんと掃除してるんだよ。あ、お茶持つてくるね。」

そう言つて、台所へ向かおうとした俺の手を彼女が掴んだ。

「いい、大丈夫。ここにいて。」

俺は言われるがまま、彼女の隣に腰を下ろした。

「直樹は、自分のこと俺つて言うのね。」

「あははは、」

俺はカフェでのことを思い出し、おもわず苦笑いした。

「別にいいわ。そんなことくらい——。」

私ね、直樹。私、人を殺したの。

5年前東北の小さな街で起きた郵便局の強盗事件で。報道では、犯人は銃の暴発で死んだってことになってたんだけど、本当はその場にいた私が、強盗の拳銃を奪って撃ち殺した。」

彼女は俺に寄りかかり、下を見つめながらそう話始めた。

「11歳のとき。それから私、銃を見ると吐いたり倒れたりしちゃうんだ。

銃を見ると、殺した時のあの男の顔が浮かんできて——。」

怖い、すごく怖い。」

「でも——。」

「でもGGOでなら大丈夫だった、シノンとは違ったの。

だから思ったんだ。GGOで一番強くなれたら、きっと現実の朝田詩乃も強くなれる、あの記憶を忘れることができるって。

なのにシノンはいくら強くなっても、現実の私は弱いまま。きっとbobで優勝しても、多分それは変わらないと思う。」

そこで、詩乃の話は途切れた。

「でも私、貴方と出会って、直樹の話を聞いて、私以外にも同じ経験をして苦しんでいる人がいるってことを知った。私は辛い過去のことから逃げてばかりだけど、直樹はしっかりそのことに、向き合っているんだってわかった。

だから私決めたの——。」

詩乃は立ち上がり、こう言った。

「私も、私から逃げない。自分の過去としっかり向き合おうって、貴方がさつき話してくれただから決められた。

ありがとう、直樹。」

そう言った彼女の顔は出会った時よりも少し、輝いているように見えた。



## 第十四話

新川 side

「朝田さん——」。

彼の眼には、カフェで彼女と仲が良さそうに話している一人の男が映っていた。

## 主人公 s i d e

朝目を覚ましたら、隣に詩乃が寝ていた。

そつと、起こさないようにベッドから出ると着替えて、朝食の準備を始めた。冷蔵庫から解凍しておいた鮭を出しグリルで焼き、その間に昨日作っておいた味噌汁を温めめ、サラダのための野菜を切り始める。

ちようどその頃ベッドの方から音がした。どうやら詩乃が起きたらしい。

その間にも俺は手を止めず、今度はお弁当の用意をしていた。

「おはよ……。」

メガネをかけず、可愛いらしく寝癖をつけて、大きなあくびをしながらこつちへ来た詩乃は、まだ寝ぼけているみただった。

「おはよう、詩乃。」

詩乃は見る見る内に顔を赤くして、洗面所へ向かって走って行った。

俺が朝食を作り終えテーブルにお皿を並べ、盛り付けていると、寝癖を直してメガネをかけた詩乃が、洗面所から戻ってきた。

「おはよう、詩乃。朝ご飯できてるよ。」

「つえ?! あ、私の、ために作ってくれたの?」

「そうだけど——。いらぬい？そ、そうだよね、つい最近知り合つたばかりの人に朝食を作つてもらうのつて、流石に気持ち悪いよね。」

「ち、違ふの。そうじゃなくて、そうじゃないの。実家では別だけど、私一人暮らしただから自分で自炊してて、誰かに作つてもらうとか、そういうの今までなかつたからさ。なんつて言うか、その、ありがたいつて言うか。その——嬉しかつたんだ、私。家族以外にこうして誰かに家で作つてもらうの初めてたつたから。」

詩乃は朝あつた時のように顔を赤くしてそう言つた。

「だから、今度は私が直樹に作つてあげるね。」

「そんな大したものでもないけど、喜んで貰えたなら、作つた側としても嬉しいかな。」

ささ、早く食べないとご飯冷めちゃうから食べよ。」

俺が「いただきます。」と言うと詩乃もそれに続いて「いただきます。」と言つて、食べ始めた。

「ご馳走様でした。」

「お粗末様でした。」

「あー美味しかった。」

詩乃は残さずに全部食べてくれたようだ。

「それはよかった。」

「本当に美味しかったわ。朝からこんな食事自分ではなかなかできないもの、なんなら毎日食べたいくらい。」

「それなら毎日作ろうか？」

「え？」

「俺、いつも一人じゃ多く作り過ぎちゃうし、詩乃さえ良ければ毎日朝ご飯作ってあげられるよ。」

「それホント？なら作ってもらおうかなあ。でもそれだけじゃ悪いし私も直樹のお弁当を作ってあげる。」

詩乃はどこか満足そうにしていた。

「それなら俺もお願いしようかな。つあ、でも今日のお弁当、俺が詩乃の分まで作っちゃったけど——。」

「お弁当も作ってくれたの!？」

詩乃は目を丸くして言った。

「じゃあ、今夜の晩ご飯は私が作ってあげる。」

「俺が勝手に作ったただだから、気にしなくてもいいのに。別に明日からでも——。」

「私が気にするわ。男に料理作らせる女とか、私が料理出来ないみたいに見えるもの。」

「つふふ。」

詩乃があまりにも一生懸命だったので、思わず笑ってしまった。

「何がおかしいのよ。今度GGOで会ったら貴方を殺すのはこの私だから。」

「じゃあ、次のbobで決着をつけよう。昨日はチーターを証明するために、わざと負けたし。」

「ふん。直樹が別にわざと負けなくても、あの場で私が勝っていたわ。」

「どうだか。俺は昨日を除けば、この世界で負けたことなて一度もないが。」

「今までは運がよかっただけよ。今度のbobで貴方に味あわせて上げるわ。敗北を告げる弾丸の味を————。」

## 第十五話

その男は死神と呼ばれていた。多くの者からは、その黒いマントと大鎌を持つ姿から。また、ある者達からは敬意を込めて――。

男はそのゲームで初めて殺人を犯した。

男は皆から信頼されていた。

男はそれを利用していた。

男は誰にもバレずに人を殺していた。

男は殺人鬼だった。

男は――。

「この裏切りもんがあアアアアアア！」

そう言つて襲つてきた一人のプレーヤーの首を男は刎ねた。

どこか、場違いに手を叩く音が聞こえた。

「相変わらず、素晴らしい腕前だねー。」

「プーか。」

「本当にキミには驚かされるよ。なんてつたつて、攻略組の一角を担うキミがまさかこのゲームで最も多くの人を狩つてきた、レッドプレーヤーだなんて、そのカーソルを見て誰も思わないだろう。」

男の上には緑色の明かりが光っていた。

「驚くことでもない。抜け道など山程ある。さっきの様に。」

男はたつた今自分を殺そうとしてきたプレーヤーのいた場所を見て言った。

「それにしてもだ。それで、明日か？」

「ああ、決行は明日。お前達が待ち伏せをし、混乱に乗じて俺も加わる。」

「ふふ、奴らを殺すことをずっと待っていたんだ。明日が楽しみだなあ？死神さん。」

決行の日、その場に死神と呼ばれた男は姿を見せなかった。

その日攻略組から組織された討伐隊のメンバーは壊滅的な打撃を受けながらも、ラフィンコフィンと呼ばれる殺人ギルドのメンバーを牢獄に送った。ただ、一人を除いて。

???  
s i d e

「菊岡さん。アンタは何故俺が死神と呼ばれていたか知っているのか？」

店を出たところで、男は菊岡に言った。

「その風貌とキャラ名が故に、だろ？」



菊岡はそう応えた。

「そうかい。」

男はそう言い残し、人混みの中に消えていった。

### 主人公 s i d e

いつもは余裕をもって行くのだが、今日は朝部活の時間ギリギリの時間に到着したため、ハゲに、部長で風紀委員長でもあるお前がどーのとか言われたが、気にしていない。「黒田せいんぱーい、今日はどうしたんですか？いつも誰よりも早く部活に来ているのに。」

「今日の朝ちよつとのんびりし過ぎちゃってね。それでいつもより遅れたんだ。」

「へえー。部長でもそうゆうことって、あるんですね。」

俺に話しかけてきた後輩の女子は意外そうだった。

「まあね。たまには僕でもミスもするさ。でも、それを支えてくれる君のような人がいるから、僕はいつも慌てずに済むんだ。心配してくれてありがとうね。」  
「つえ、いえ。こちらこそいつも部長にお世話になっているし：／／。」  
「そう言うの後輩の女の子は走って行ってしまった。」

その日の放課後の部活では、その後輩にやたら話しかけられたが正直、迷惑だった。

帰ってくると台所の方からいい匂いがしてきた。

「あ、おかえりなさい。今夕飯を作ってる途中だから、手を洗って待ってて。」

「お、おう。」

一瞬、戸惑いを覚えつつも俺は洗面所に行き手洗って、うがいをした。

「そういえば、朝夕飯を作るからと、詩乃に合鍵を渡したのをすっかり忘れてしまっていた。」

それにしても、俺の家で女の子が夕飯を作ってくれているというのは不思議な気持ちだ。

今まで何度か母さんが来てくれて、料理を作ってくれたことは何度かあったが、それとはまた違う気がする。

「夕飯出来たわよ。」

そんなことを考えていると詩乃に呼ばれた。

リビングに来て俺は驚いた。テーブルの上には色とりどりの料理が並べられており、それを見るだけで、さつきまでお腹が空いていた訳でもないのに思わず、よだれを垂らしてしまいそうだった。

「詩乃コレは——。」

「今日の朝ご飯とお弁当のお礼よ。別になおきのためだけに作ったわけじゃないし、私も食べるから勘違いしないでよね……／＼。」

詩乃は少し頬を赤らめてそう言った。

「それじゃあ頂こうかな、いただきます。」

俺がそう言うのと、詩乃も慌てて「いただきます。」と言って食べ始めた。

「うまい！この胸肉めっちゃ柔らかくて美味しい。詩乃って料理も出来るんだね。」

「別にそんなにすぐく出来るってわけでも——。」

そんな会話をしながら食べていると、あつという間に食べ切ってしまった。

「あー、美味かった。ご馳走様でした。」

「お粗末様でした。」

「ありがとう、詩乃。実は俺も昨日のお礼に、詩乃にプレゼントを買ってきてるんだ。」

そう言つて俺が取り出したのはプレゼント用に包装された少し小さい箱だった。

「つえ、ありがとう。開けてみてもいい？」

箱を開けると、中に入っていたのは雪の結晶の形にデザインされたプレスレットだった。

「こ、こんな高価なものどうして——。」

詩乃は驚いていたが、それ以上に戸惑っているようだった。

「詩乃にはお世話になつたし、似合いそうだと思つたから——いらなかつた？」

「そんなことない！その…なおきに私、たくさんもらつてて、せっかく今日の夕飯、頑張つて作つたのに、またもらつて——これ以上返せない。」

初めて助けてもらつて、

過去のことに立ち向かう勇気をくれて、

私の手を握つてくれて、

ご飯まで作つてもらつて、

その上こんな素敵なものまでもらったら私、何も返せない……………」

「詩乃から、俺はいつぱいもらってるよ。」

「つえ、」

「詩乃に勇気をもらったのは俺も同じだ。」

詩乃は他の人が聞いたたら軽蔑するような話を真剣に聞いてくれた。

俺が情けなく泣いていた時も、離れずに一緒にいてくれた。

それに加え、こんなご馳走まで用意してくれて、俺の方こそ詩乃に何もしてあげられてない。」

「でも……………」

「でも詩乃は、俺にたくさんもらったって、言ってくれた。」

詩乃の言葉を俺が遮った。

「そのおかげで、こんな俺でも人の役に立てることがあるんだって、初めて思えた。」

だから詩乃。俺は詩乃に人生をかけても、返しきれないほどの恩をもらってるから…………、その、何っていうか…………、えっと、お互い様だから気にしないでっていうか…………

「……………」

「つふふ、」

詩乃が笑った。

「ふーん、そっかー。なおきは私に一生かけても返せない恩があるのね。」  
「つえ、いや、まあ。はい。」

「じゃあ、なおき、私をずっと守ってね——」。

## 第十六話

主人公 s i d e

bobに出場するため俺はGGOにログインしていた。エントリー時間まで、まだ余裕があるが早いに越したことはない――。

「つつ、痛ってててて、」

いきなり見知らぬ女が俺にぶつかってきた。

「大丈夫?」

（「誰だコイツ?」）

と、思いながら手を差し出すと、「つあ、す、すいません。」と言つて手をとつて立ち上がった。

「気を付けろよ。」

そう言つて立ち去ろうとしたところ、呼び止められた。

「あ、あの……総督府つて、場所知りませんか？」

「見たところ初心者っぽいけど……もしかして、b o b に出るつもり？」

「は、はい、そのつもりですけど——。」

（「初心者で、しかも女が、よくもまあそんなことを考えるもんだ。」）

「ほお。なら、上手くいけば、俺とあたる機会もあるかもな。」

「あなたも出られるんですか？」

「ああ、そのつもりだ。けど、初心者なら銃はどーすんだ？何も持つてねーだろ。」

「つあ！あの、すいません。こちら辺で武器屋的などこありますか？」

ぶつかつてきた身でありながら、こうも凶々しいと怒りを通り越して、もはや呆れる。

「ガンシヨップなら大つきい店が。ここを真っ直ぐに進んで、左に曲がつたところにある。エントリー終了時間まではまだ余裕があるが、急いだ方がいいぞ。」

そう言い残して、今度こそ俺は総督府に向かつた。



総督府に着き、自分もエントリーを済ませ控室に入ると、そこには既に大勢のプレーヤー達がいた。

「正直、今回のbobお前誰に賭けてんの？」

「俺は闇風だ。前回大会でも2位で、前回1位のゼクシードがいないしな。」

「へえ、俺は今回シノンちゃんに賭けてるぜ。」

「お前は前回も今回もシノン推しだからだろ。」

「いや、俺はシノンちゃんにPKで撃ち抜かれたときに、俺の心までシノンちゃんは撃ち抜いっちゃったわけよ。」

「お前ヘツシヨ一発だったって、自分で言ってたし、全然言ってる意味わかんないわ。」

そんな話を聞いていると、さっきの女が何故かシノンと一緒に入って来た。

「っあ！」

「グリムリパーもしかして、この子と知り合い？」

「いや、こつち来るときにぶつかってこられて……。シノンこそ、知り合い？」

「私はこの子が始めたばかりで、困っていきそうだったから手伝ってたのよ。」

「へえ。名前は？」

「そう言えば、私も聞いてなかった。ねえ、あなたのプレーヤーネーム教えてよ。」

「あははは、いえ……。あの、すいません。実は私こういう者でして――」。

そう言いうと、プレーヤー情報が送られてきた。

「キ、リ、ト。ふうん、おもしろい名前ね。って、M A L E……」

「マジか……」

流石の俺でも言葉が詰まった。

めんどくさい女だと思ったら、まさかのめんどくさい男だったとは。あれ？ 評価変わってないわ。やっぱ俺男女差別しないなんて過去を除けばなんて出来た人間なんだ。

だが、シノンは違ったらしい。

「つうううう……！！」

いつの間にか、キリトと名乗った男は股間をおさえて地面に蹲っており、その横にシノンが立っていた。

この僅か2秒程の時間に一体何があったのだろう。いや、分かるけど……。

「次俺の試合だから。」

あの空気を俺にはどうすることも出来なかった……………。